未来からの贈り物☆

偽屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未来からの贈り物☆

【Ｎコード】
Ｎ９８８６Ｄ

【作者名】
偽屋

【あらすじ】
夏休み。それは学生にとって唯一の楽しみだ。しかしいま、俺には理解することが難しいものが、やってきたのだった（起きたのだった）。

Ｐｒｅｓｅｎｔ．１　【緊急事態？】

夏休みが始まってもう二週間が過ぎる。

俺は、夏休みが始まってもう二週間経ったことなんて、まったく気付いてはいなかった。

それは、そんな事よりも大変な事態が起こったからだったのだ。

「ねぇ、かなめさん。」

俺の名前を、俺と同い年ぐらいの少年が呼んだ。

少年は俺よりも多少背が小さく、俺を見るときはいつも上目目線である。

「僕のこと、信じてくれましたか？」

そう、大変な自体の原因はこいつだ。

こいつの名前は誼田快(よしみたかい)。

自称『俺の孫』である。

ちなみに、俺、誼田(よしみた)かなめ。

今年で中二の十五歳。

まだまだピチピチの男子生徒だ。

ピチピチというと、やっぱり爺くさい、と思ったりはするが、そこは置いておいてほしい。

実をいうと、俺自身信じられていない。

こいつは最初、俺のことをお祖父ちゃん、と呼んだのだ。

こいつと会ったのは、夏休みに入る前日。

いまからきちんと説明しよう。

頭がきっとこんがらがるから。（ってか一緒にこんがらがってください！）

Ｐｒｅｓｅｎｔ．２　【自称孫登場！】

ミ～ンミ～ン・・・。

夏に居ない所なんて無いセミの鳴き声が木霊し続ける。

セミの鳴き声は、暑さをより燃え上がらせるから嫌いなのだ。

「あ〜〜つ〜〜い〜〜〜。」

俺はいつもと同じ、日向のかなり当たる道を重い足取りで歩いていた。

暑い暑い暑い・・・！！！

暑すぎるッッ！！！

俺が通う学校の通学路は、このあっつい道しか通ることができない。

いや、すぐ近くには涼しい日陰に恵まれた森があるのだが、
そこは危ないようなので、そうそう近寄れない。

この地域は普段暑いが、夏になると身体がナメクジのように溶けてしまいそうになる。
（ナメクジになったことは無いが。）

俺はいつまで経っても、この暑さに慣れないでいた。

夏になると、セミを恨めしく思ったりした。

（単なる八つ当たりだ。）

微かにふらつく足を精一杯前に振り上げていくと、俺は目の前に変な物体を見つけた。

・・・ＵＦＯ・・・？？？？

目の前にあるそれは、見た感じテレビとかでよく見る円盤型のＵＦに見えた。

夏の暑さに、とうとう視界が狂ったかと目を擦ってもう一度見てみると、

やはりＵＦらしき物体はあった。

確かに。

そのＵＦＯは円盤の部分が、落ちた衝撃なのか少し欠けて壊れていた。

そのＵＦＯをみて、俺は一瞬だけ寒気を感じた。

その寒さは、とても気味悪いように感じ取られたのだが。

俺は唾を飲み込もうと必死で（最終的には詰まった）、息を殺しながらＵＦＯに近寄った。

好奇心で近寄ったんだ。

いや、好奇心が無ければ近寄らないって、普通。

俺が近づいたとたん、そのＵＦＯの扉らしきドアが白い煙を出して開いた。

（なんか、ＳＦ映画みたいだな。）

「あっちゃ～。燃料切れだ。しまった、予備持ってくるの忘れた。」

そんな声が白い煙の中からして、その声の人物は俺の前に現れた。

「・・・おっ？もしかして僕、ツイてるかも。」

そう、その人物こそが、自称『俺の孫』こと、誼田快なのである。

「もしかしてもしかすると、あなた、誼田かなめさんですか？」

俺は冷や汗を拭いながらも一応答えた。

「あ、あぁ・・・。」

さすがに大きなリアクションは取れなかった。

人間、怖いものを目の前にするときには必ず動けなくなってしまうのだろう。

なんて思った。

「やっぱりっ！僕、あなたの孫息子の誼田快です☆」

―は？

・・・とまぁこんな感じのリアクションでした。

何かすいません。

Ｐｒｅｓｅｎｔ．３　【証拠写真】

「ちょっと待て、俺はまだピチピチの十五歳なんですけど・・・。」

冷静になろうとしている俺に向かって、快は突っ込みようの無い突込みをした。

「ピチピチってジジイくさいからやめてくれますか？」

・・・すいませんでしたねっっ！！（怒）

「まぁとにかく、僕はなんと！六十年後の世界からやってきたネコ型ロボットなのですっ♪」

「ドラ●も●かよっっ！！しかもお前どう見てもネコ型じゃねぇだろっ！」

「いやだなぁ、六十年後ジョークですよ。」

そんなジョーク、聞いたこと無いから。

ふつ～に・・・。

「あ、でも、本当に六十年後からやってきたんですよ。このタイムマシンを使って。」

そう言って、れいのＵＦＯを指差した。

それ、タイムマシンだったの…？

そんな疑問を浮かべる俺を明らかに無視して、快は必死に説明していた。

「お祖父ちゃんが結婚して、そして生まれた赤ちゃんが僕のお母さんで、そしていま、僕がこうしているわけでして・・・。」

明らかに分かり辛い説明ありがとう！（説明している本人もハテナを浮かばせてるしね）

頭を抱えて聞いていたいよ。

「いや、もういいし。」

俺は快に強く言って、説明を止めさせた。

（半ば強制終了）

「なんとなく分かった。」

そんな分かりやすい嘘をついて、俺は快に質問した。

「で、お前、最近流行ってるの？そうゆーイタズラ。」

俺は呆れて快に言った。少なくとも、このときは全く信じてはいなかったのだった。

「もう、何事にも諦めて信じることが大切ですよ？疑っていると、将来よどんでしまいますから。」

「悪かったな、疑ってて。当たり前だろ、信じられっかコノヤロウ。」

そう俺が言うと、快は微かに方のところに怒りマークをつけて、ＵＦＯの中に戻った。

どうする気かと思えば、快は一枚の写真を俺に渡した。

「はっっ！！！コレハッッッ！！！！！」

その写真には、一人の小さな幼児がいて、真っ裸で部屋の中を走り回っている光景が写しだされていた。

目ん玉が飛び出そうになった。

なんとその写真は、俺の年少のころの写真だったのだ。

しかも、一枚しかないはずの、赤いアルバムの中に封印されていたはずの、あの恥ずかしい写真が、知らないはずの少年に持たれていたのだ。

驚かないやつのほうが凄いと思わないか？

「何でお前、俺の写真をぉぉっ！！」

取り返そうと思って手を伸ばしたが、直ぐに叩かれた。

「かわいいですよね～。お祖父ちゃんもこうゆ～時があったんだね。」

何故か感心した口調で言っている快に、俺は生まれてはじめて『恨んでやる』という気持ちを覚えた。

「てめぇ、俺を怒らせに来たのか・・・？」

てかもう六十年後だが一〇〇年後だがどうでもいいから、早く帰れ。

「まぁたしかにそれもありますが・・・。」

おい、あるのかよ…！

「僕は忠告しに来たのです。お祖父ちゃんに。」

その言葉を発したときの快の表情があまりにも真面目で、一瞬戸惑った。

「忠告・・・？」

ごくりと音を立てて、唾は喉を静かに流れていった。

（途中で止まらなくてよかったよ。）

「・・・まぁこんなアッツイ場所で話すのも何なんで、かなめさんの家にレッツラゴ～★」

「え、ちょっと待って、このタイムマシン（？）はぁぁぁぁーーー！！！？？」

という流れで、いま快は居候の身として俺の部屋に居座っている。

（生意気でムカツクが、仕方ない。）

快が言うに、やつは本当に俺の孫らしい。

俺が結婚して出来た娘の、息子だそうだ。

もう訳がわかんなくて、俺はこの数日間、セミの激しい合唱も耳には入らなかった。

にしても、なんでタイムマシンがあるんだろう・・・。

俺がジジイになっている時代には、もう文化がかなり進んでいるってことなんだな・・・。

「・・・いや、まぁ、信じたって言えば信じたけど、信じてないと言えば信じてない。」

～現在に戻って、今・・・。

「優柔不断な人ですねぇ～。そこはもう余計なこと考えないでスパッと認めちゃいましょうよ。」

いや、君が俺を悩ませているんですが・・・。

「だ・か・ら、僕は未来からやってきたネコ型ロｂ・・・」

「六十年後が世界に変わってだけでしょ！！お前人間だろ、ロボットじゃあねぇだろ。」

これじゃ俺ら、売れない漫才師みたいじゃあねぇか。

「なに本気にしてるんですか。そんなのにイチイチ突っ込んでたら、将来きっとハゲますよ～？」

「大きなお世話だぁぁ！！」

ちゃぶ台返しをしていたお父さんたちの気持ちが、今なら分かる気がする…

（いつの時代だ・・・。）

「―で、お前どうやって六十年まえに来たわけ？」
ある日の俺の質問に、快は不敵に笑って、いつの間にか俺の部屋に持ち込んでいた、
あのＵＦＯ（本人曰くタイムマシン）を指差しているだけだった。

Ｐｒｅｓｅｎｔ．４　【今時語で戦争？】

「かなめさん、かなめさんは、他人のために命を絶つことが出来ますか？」

外は歩いていられないほど蒸し暑い（部屋は冷房★）その日に、快は冷たい言葉を出した。

「…は？なに、いきなり。」

俺はマンガにおとしていた目を、快に向けた。

「いや、例えばですよ、例えば。参考に聞いてみただけです。嫌なら何も言わなくて結構です。」

「・・・俺は・・・他人のためになんかに命を捨てることはできない。でも、俺の命で多くの人が助かるときが来るのだとしたら、俺は喜んで自分の命を捨てると思う。」

自分なりに恥ずかしいことを言ったなぁ・・・。

少し感心している俺の頭上に、氷の塊が落ちてきた。

「そんな日、一生無いと思いますけどね♪」

その言葉は、いまが夏とかそうゆうの関係なく俺の心に重く圧し掛かった。

俺の心はピュアなんだよ。

きっと。

「そっちから聞いておいて、それは無いだろ・・・。」

俺の声に、快は今度は何も言わずに、にんまりと笑って、俺が読んでいたマンガを取り上げて読んでいた。

（酷っ・・・！）

そして、目線をマンガから外さずに呟くように俺に言った。

「僕は、家族のためになら死ねますよ？勿論、かなめさんのためでも。」

そう呟いた言葉が、俺には意外なものだったため、俺は一瞬固まったが、直ぐにからかってやろうと言った。

「じゃあ、しんでみろよ。俺のために。」

冗談半分で言った俺の言葉に、快はすんなりと返した。

「はい、いいですよ。」

…即答かよ…。

「・・・お前、ＫＹだろ。」

いまどき（俺が言うのもおかしいが・・・）の言葉を快に言った。

たぶん意味が通じるかと思ったのだが・・・。

「・・・？・・・！ああ、『クソ汚れた野蛮な貧民』、のことですか？？」

・・・ダメだった。何気に酷いこと言ってるし・・・。

「全然違ぇよ！！『空気読めない』奴ってことだッッ！！なにお前、さらりと酷いこと言ってんだぁぁっ！！貧民なめんなよっ！これでも頑張って生きてんだよぉぉぉ！！！！！」

「ほぅ、この時代のギャルという愚民は、そういう言葉を開発していたのですねっ！」

快は話をそらすように言った。

「・・・お前、前々から思ってはいたが、文がおかしいぞ・・・。」

ってか、愚民って言うな・・・。

「では僕の時代は、今ＩＳというギャル語が流行っています！そうですねぇ、かなめさんみたいな人のことです♪」

「・・・イケてる秀才・・・？」

かすかな期待をのせて（いや、のせてないけど）、俺は言ってみた。

「いえ、まったく違います。かなめさんは、何処を如何見ても、イケてないですから、大丈夫です。」

うん、それ、全然フォローしてないよ、むしろ傷つけてるぐらいだから。

「じゃあ、なんだよ。」

頬に怒りマークをつけて、俺は聞いた。

「『いつまで経ってもモテない、とても可哀想な庶民』、のことです。」

・・・おい待てコラ。完璧流行るわけないだろ、そんな言葉。

ってか流行ってほしくないし・・・。

「お前、俺のことがそんなに可哀想に見えるのか？モテなそうに見えるのかっ？！」

叫ぶように言った俺の声に、快は五月蝿そうに耳を塞ぎながらため息をついた。

「だってかなめさん、いえ、お祖父ちゃんは、」

いえ、おじいちゃんは、って文はいらないから。

「祖父ちゃんゆうなや・・・。」

快は、呟いた俺の声を聞こえないフリをして続きを言った。

「・・・かなめさんはのどに餅を詰まらせて即死してしまったのです！」

・・・俺、一体これからどんな人生送っていくんだろう・・・。

「分かった、俺は年寄りになったら、一生餅くわねぇから・・・。」

「いや、僕は全然困りはしませんが。」

つるせぇぇ！！

少しぐらい同情してくれよっっ！！

とまぁ、心の中で号泣（ある意味）寸前だった俺は、

溜まりに溜まってしまった宿題があることに気づき、快に言った。

「お前、頭いいんじゃないか？だったら手伝ってほしいんだけど・・・。」

「いくらで手をうちますか？」

目を光らせて聞いてきた快の耳もとで、俺は怒鳴ってやった。

「居候の身でなにを言うかっっ！！！」

その声に圧倒された快は、渋々俺の宿題を手伝ってくれた。

・・・わざと間違えてなけりゃいいが・・・。

Ｐｒｅｓｅｎｔ．５　【夏休みももう終わり】

無事に夏休みの宿題も終わり（合ってるか心配だが・・・）、とうとう夏休みも残り一週間となった。

「はぁ～。とうとう夏休みも終わりかぁ～。でも・・・」

俺は大きな背伸びをして、大きなあくびをした。

そして・・・

「何でまだお前がいるんだよッッ！！！」

俺は隣りでのん気にアイスを頬張っている快のほうに振り返った。

「？誰が夏休みのうちに帰ると言いましたか？」

・・・本当に帰ってほしいのですが・・・。

「お前、早いうちに帰らなくていいのか？家族が心配するだろ？？」

そう言うと、予想外の言葉が、俺の心臓を貫いた。

「それがですね、タイムマシンの燃料が無くて、自動充電が完了するのに一年かかるんですよ。だから、まだ戻れません♪」

・・・なんでそんなにも嬉しそうなのかは、俺には疑問なのだが・・・。

「一年っっ？！」

「ええ。そうです。」

なんでそんなに冷静なんだろう・・・。

こいつの頭は、いまの時代の奴にとっては痛いものだな・・・。

俺がいろんな意味で感心していると、快が思い出したようにポンッと手をうって、俺に言った。

「あ、そういえば、お祖父ちゃんの誕生日、ちょうど僕らが出会った最初の日ですよね？」

「・・・？ああ・・・そういえばそうだった気が・・・。」

もうお祖父ちゃんという言葉に突っ込むことが疲れた。

「じゃあ、僕がかなめさんの誕生日プレゼントです☆」

えぇ～？！なにいい様にまとめちゃってんの、この子っっ！！

「ちょっと待てって！俺、お前いらないから、絶対プレゼントでお前だけはもらいたくは無いから！！」

「わぁ酷い。いいじゃないですか？未来からの贈り物、ということで☆」

「なにカッコよくまとめてんだコノヤロォォォォーーー！！！！！」

もうそのときの俺の声は、大きな音で騒音を奏でるセミの音よりも大きかったような気がする・・・。

か）まぁそんなかんだで、快が帰ったのは、いつになったのか、俺自身、覚えてはいない。

っていうか、帰ったんだっけ？

快）まだ帰ってないですよ☆

か）早く帰れぇぇぇぇーーーー！！！！！

（誼田かなめ・現十七歳
&　誼田快・現十六歳・談）

END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9886d/

未来からの贈り物☆

2010年12月31日21時14分発行